

## 『元文中鉄山仕法書写』

## —解説と翻刻—

土佐 雅彦  
加納 亜由子

## 一、「元文中鉄山仕法書写」の発見と内容

ひょうご歴史研究室たたら製鉄班では、研究の一環として関連古文書の収集調査を進めてきた。

今回紹介しようとする史料は、藪田貫室長が大坂商業大学商業史博物館で見い出されたものである。<sup>(1)</sup>

同館に所蔵されている「山中田屋文書」中に、一七点の「三日月藩文書」が混入していた。<sup>(2)</sup> 目録の

解説によれば、山中田屋は富田林町（現大阪府富田林市）で薬種関係の商売をしていた商家という。

三日月藩（藩主森家）は佐用町三日月に陣屋を置いた石高一万五千石の小藩で、宍粟郡内でも一部の村々を支配していた。「三日月藩文書」が混入

した経緯などは明らかではないが、それらの中に「元文中鉄山仕法書写」「鑪鍛冶屋諸当り（目録では留元）帳」「播州縦ノ木山鉄山鍛冶屋新普請仕法立目録」の三冊が含まれていた。いずれも横帳で中央に折り目があり、別に袋があつて、表題に「鉄山書類入」として「元文中鉄山仕法書写・当時之仕法書・当時至而当仕法書」との記載があることから、これら三帳面がこの袋に入っていたと判断される。目録によればこれらの史料には「三日月藩文書」の内「鉄山」と注記され、「藩札」関係史料と一緒に納められている。しかも、双方の史料に「井上吉右衛門用」とあることから、これらは本来、井上吉右衛門が作成し所蔵していたものと考えられる。井上は同藩の関係者（大庄屋）

表1 「元文年中鉄山仕法書写」 内容一覧

| 番号    | 見出し          | 一書数 | 備考   |
|-------|--------------|-----|--|
| 鉄山方諸用 |              |     | 古来よりの定法  |
| 1     | (鉄山の事)       | 13  | 鉄山概説   |
| 2     | (山子の事)       | 9   | 山子概説   |
| 3     | 鋸折之事         | 7   | 鋸折概説   |
| 4     | 番子之事         | 10  | 番子概説   |
| 5     | (炭焼の事)       | 4   | 炭焼概説   |
| 6     | 六ツ吹鉄山抱様の積り   | 10  | 山内稼人84人×家族数(元小屋住民を除く)                              |
| 7     | 六ツ吹壱ヶ年入用積り   | 17  | 年間70枚(三日押)で銃3600駄を生産。入用銀113貫500目余。銃1駄の原価見積り31.6匁   |
| 8     | 六ツ吹鍛冶屋積り     | 23  | 長延292駄と中割小割2218駄を生産。全体の利益見積り23貫目余。利益増減見積りあり        |
| 9     | (賃銀の推移)      | 9   | 古来は銃が高値で鍛冶屋の仕事が少なかったが、中古より銃下値になり鍛冶屋が必須となる          |
| 10    | (小炭の事)       | 3   | 竪3尺横渡も3尺の籠を1升(柝)とする                                |
| 11    | (山内ひらい鉄)     | 1   | 細銃・いほ・上鉄・しめかね・打鉄などを元小屋で買い取る                        |
| 12    | 中割千割出来口積り    | 9   | 銃1駄32貫から中割千割22.4駄を生産し、一駄73.3匁余りの原価見積り              |
| 13    | 長延出来口之積り     | 8   | 下鉄40貫目から長延30貫目を生産し、1駄59.84匁余りの原価見積り                |
| 14    | 大千割出来口積り     | 8   | 下鉄55貫目から大千割44貫目を生産し、1駄51.71匁余りの原価見積り               |
| 15    | (古来の鋸山拾枚押)   | 1   | 古来の鋸山は10枚押で、山内稼人16人と少なかった                          |
| 近來の仕法 |              |     | 四ツ吹積り、元文4年仕出し                                      |
| 16    | 四ツ吹山         | 11  | 四ツ吹鑪・山内建物概説  |
| 17    | 四ツ吹賃定        | 16  | 職人(大工・炭坂・跡押)、山子、番子などの賃銀扶持。「千草屋手控帳」5に類似             |
| 18    | (四ツ吹)鍛冶方(賃定) | 13  | 鍛冶、手子、小仕事などの賃銀扶持。羽口や小炭の費用も計上。同上に類似                 |
| 19    | 才道具          | 35  | 鑪や鍛冶で使用する道具類の代銀など。「千草屋手控帳」7に類似                     |
| 20    | 四ツ吹人数抱様の事    | 10  | 山内稼人65人×家族数(元小屋住民を除く)                              |
| 21    | 四ツ吹一ヶ年入用     | 18  | 年間88.5枚(二日押)で銃2124駄を生産。入用銀118貫348匁余。銃1駄の原価見積り55.7匁 |
| 22    | (四ツ吹)鍛冶方入用   | 11  | 銃2100駄を仕入れ、長割1588駄余を生産。全体の原価見積り長割1駄104.88匁         |
| 鋸押    |              |     | 「千草屋手控帳」の引用か                                       |
| 23    | 鋸(押)         | 24  | 鋸押の賃銀・人数・概要。「千草屋手控帳」8・9とほぼ同文                       |
| 24    | 一ノ谷山鋸押入用     | 21  | (千草谷)一ノ谷山での鋸押入用見積り。鋸12枚を生産。同上10とほぼ同文               |
| 25    | (一ノ谷山)鋸折入用   | 17  | 鋸12枚を大折・小折して鋸90束余にする入用見積り(1束56匁余)。同上11・12とほぼ同文     |

ではないかと推定される。

本紀要では「元文年中鉄山仕法書写」を翻刻するが、その概要を表1に示す。番号は翻刻文中に追加したもので、史料中に見出しのあるものはそれを使い、内容から翻刻者が仮見出しをつけたものは括弧書きとした。各項目中に見られる一書の数を書いておいたが、短文もあれば勘定書の項目もあり、量的目安を示すにすぎない。表題にみられるとおり、この簿冊は元文年間(一七三六～一七四一)に、鉄山経営の基本から技術や経理などにわたる内容をまとめた原本(「元文年中鉄山仕法書」)の写しと考えられる。大きくは三部構成となっており、「六ツ吹」を中心とする古来よりの定法をまとめた「鉄山方諸用」(1～15)、元文年間に盛行していたという「四ツ吹」を紹介しその見積りをする「近來の仕法」(16～22)、一ノ谷山(現穴栗市千種町)での操業を通じて紹介される「鋸押」(23～25)である。

各項目を簡単に紹介すると、冒頭の1から5は、たたら製鉄の概説とでもいうべき部分である。高殿の寸法、本床や小舟などからなる床釣の構造が

ら始まり、たたら炉の寸法、元釜からの築き方、送風用の木呂竹などにもふれている。さらに、操業法に「六ツ吹」「四ツ吹」「鋳押」「鋳折」などがあること、たたら場で働く職人に「大工(村下)」「炭坂」「跡押(炭焚)」「番子」などがあること、原料となる鉄砂、炭(山子や炭焼)、釜土などについて言及していく。この部分の内容は後にも重複してあらわれ、賃銀などでは数値が合わないこともある。

6から8では「六ツ吹鉄山」での操業と大鍛冶について述べる。八四人の山内稼人(家族や元小屋住民を除く)で「三日押」と称して年間七〇枚(回数)操業して銑三六〇〇駄(一代当り五〇駄余)を生産し、大鍛冶場では「長延」二九二駄と「中割小割」二二一八駄にして出荷する見積りをしている。たたら場での入用銀を一一三貫五〇〇目余(銑一駄当り三一匁六分)とし、大鍛冶場での製造費用も加えて経費を出し、出荷物を販売するなどして年間二三貫目余の利益を見込んでいる。9から11は冒頭の概説で紹介されなかったような賃銀の推移、鍛冶用の小炭、山内に散在する鉄

の回収などを記す。12から14では大鍛冶場で通常の割鉄(「中割千割」)以外に、「長延」や「大千割」などの地金を製造する見積りをする。15は一項目と少ないが、かつての「鋳押」は拾枚押で稼人一六人が働くに過ぎなかったと記し、往古の播磨「白鋳」時代を想起させる。

16から22では元文年間に盛行していたとみられる「四ツ吹山」での操業と大鍛冶について詳しく紹介する。16は「四ツ吹山」の概説で、1の「鉄山の事」と対比して読める。「六ツ吹」と同様にまとめると、六五人の山内稼人(家族や元小屋住民を除く)で「二日押」と称して年間八八枚半操業して銑二二四駄(一代当り二四駄)を生産し、大鍛冶場では「長割」一五八八駄にして出荷する見積りもしている。たたら場での入用銀は一一八貫三四八匁余(銑一駄当り五五匁七分)とする。「六ツ吹」よりやや多くの費用を投資し、銑一駄当りの必要経費では一・八倍近くにもなる「四ツ吹」が、なぜ盛行していたのであろうか。砂鉄の使用量でも「六ツ吹」が銑一駄当り砂鉄三駄三分に対し、「四ツ吹」では同四駄半と見積もられて

おり、理解に苦しむところではある。19は「才道具」で、たたら場の道具類やその費用を記す。22の末尾に「右四ツ吹積り 元文四末年（一七三九）仕出し也」とあり、およその成立年代をしめす。

23から25は、23で「鋳押」「鋳折」について再び説明し、24と25は辰（元文元年力）盆前後に千草谷の「一ノ谷山」で行われた「鋳押」と「鋳折」について、それぞれ費用計算をしている。「鋳押」は通常一五枚押と記すが、ここでは一二枚を生産し、一枚当りの経費を二二三匁とする。生産された小鋳塊はどのようなものであったのだろうか。盆後の「鋳折」により「鋳」九〇束五貫五〇〇目を製造し、必要経費を一束当り五六匁四厘と計算する。「鋳」一束は一六貫、二束一駄で出荷されたようだ。

さて、「元文中鉄山仕法書」（写ではなく原本）の作成者については重要な手がかりがある。それは本紀要第三号で伏谷聡が再翻刻した「千草屋手控帳<sup>3</sup>」と重なる内容が含まれていることである（表1参照）。23・24・25にいたっては「手控帳」の該当部分とほぼ同文である。なお、24と25には

記事の一部欠落があり「手控帳」をもとに「鉄山仕法書」の23・24・25などを書いたことが分かる。「千草屋手控帳」の作成者は「元文中鉄山仕法書」にも深く関わっている。

二、三日月藩文書伝来の経緯と残る二冊

「元文中鉄山仕法書」が三日月藩に伝わった経緯については、以下のように考えられる。

「千草屋手控帳」38に、音水山（現宍粟市波賀町）の請負期間を延享二年（一七四五）から五年間とする記事中に「森対馬様預り地」とある。また、本紀要第七号で紹介した山方役所の「勤方覚書<sup>4</sup>」中にも、五ヶ所口留御番所での勤務地交替に関連し「延享二五年森対馬守殿御預所二而五拾ヶ年余支配有之」とある（現在のところ確認できる限りでは、三日月藩が山方役所を支配した期間は、間に生野代官支配などを挟みながら、延享二年（一七四五）から寛政六年（一七九四）まで）。延享二年から山方役所を預かった三日月藩は、宍

粟郡内での鉄山経営を独占していた千草屋から、不案内な鉄山経営の概要を得ようとしたのであるまいか。三日月藩文書として伝わった鉄山経営の簿冊三冊のうち残る二冊は、天保初年の日付を持つ。「元文中鉄山仕法書」の写しは、百年近くを経た天保年間に同藩が新鑪鍛冶屋普請を目論んだ際、参考として使われた（書き写された）ものか。

残る二冊についても、ごく簡単に紹介しておく。天保三年（一八三二）の日付をもつ「鑪鍛冶屋諸当り帳」は四丁にすぎず、鑪一代と大鍛冶一日の損益見積もりをしている。一代の操業を「四日押」と称し、銀一貫〇九七匁余をかけて銑四〇駄を生産し、七八二匁余の利益を見込んでいる。大鍛冶では一日に銑一駄半を原料として六回作業し、割鉄三一貫五〇〇匁製造して五二匁余の利益を上げるとする。また、鑪打立には三百両かかる」と記すが、大変大雑把な書きぶりである。

天保四年の日付をもつ「播州縦ノ木鉄山鍛冶屋新普請仕法立目録」は縦ノ木山鉄山（現宍粟市一宮町）についての一七項目にわたる本格的な見積

もりで、鑪（高殿）・鍛冶屋・その他の諸小屋の寸法・間取から始まり、鉄穴口も新たに大小一口を普請するものとする。山内稼人の待遇を「西七ヶ国流」と称して鑪、鍛冶屋、山方その他に区分してあげている。次に「縦ノ木山」に特化して鑪・鍛冶屋の普請費用、鉄砂・大炭・小炭の原料調達費、扶持米購入費、山内諸小屋の建設費を積み上げ、銭高と銀高を金高に換算する際のレートにやや難がありそうではあるが、合計凡五千両と見積もっている。最後に、鑪一代（「四日四夜」と記し一年七二代とする）で、銀一貫三九一匁余をかけて銑五〇駄を生産し、六〇〇目余りの利を上げ、銑四五貫を仕入れた大鍛冶では割鉄三二貫を製造して五〇匁余の利益を見込む。大鍛冶屋を五軒として年間二三〇〇駄出荷するというかなり厳しい目標であるが、鑪での利と合わせ年間一五九貫八七九匁もの収益を見積もる。これら二冊の翻刻については、ひょうご歴史研究室ホームページ上に掲載していただく予定になっている。

最後に、現在のところ、天保初年における縦ノ木鉄山の請負記録は確認されていない。前述した

山方役所「勤方覚書」(文政元年)には、山崎町塗師屋善蔵が文化一四年(一八一七)から二年間、運上銀七八七匁五分で請負った記事がある。次の請負記録は、今回の紀要で紹介している入江家文書中に、天保一四年(一八四三)、高砂の紀伊国屋が請負っていた証文があり、この間に三〇年程度の休山期をさみ不合理はない。三日月藩が新普請をした可能性は低いであろう。

いずれにせよ、今回新たに発掘された三史料は、技術的な記事、操業に関わる数量的な記事などを豊富に含み、それらの乏しかった播磨のたたら製鉄解明に重要な手がかりを与えてくれるものと信じる。

(1) 藪田室長は令和五年七月、同博物館所蔵史料を現地調査された。土佐と加納は室長から撮影写真の提供を受けて翻刻した。今回発見の経緯とその意義について室長からコメントを頂戴し、執筆に利用させていただいた。三日月藩の「藩札」と「鉄山」との関係については、大変に興味深いが、今回は紹介できていない。

(2) 『大阪商業大学商業史研究所資料目録』第二集

(大阪商業大学商業史研究所、一九九四年)。

(3) 伏谷聡「千草屋手控帳」解説と翻刻「(ひよ

う)歴史研究室紀要」三、二〇一八年)。

(4) 笠井今日子・土佐雅彦「勤方覚書」(解説と翻刻)

「(ひよ)う歴史研究室紀要」七、二〇二二年)。

(5) 大槻守「鉄山一件 山方役所留記」(解説)

「(ひよ)う歴史研究室紀要」別冊「近世播磨のたたら製鉄

史料集」、二〇二〇年)。

#### 【翻刻に際して】

- ・文字の配置はなるべく原史料の体裁を尊重した。
- ・字体は原則として常用漢字を用いた。
- ・計数単位の「ヶ」「り」は各「貫」「厘」とした。
- ・合字の「ち(より)」はそのまま使用した。
- ・助詞等はなるべく平仮名に改めたが、「者(は)」「而(て)」はそのまま使用した。
- ・読みやすくするため、適時読点、並列点を付した。
- ・誤字等は(カ)、脱字は(脱カ)で示した。
- ・計算が合わない箇所などには(ママ)を付した。
- ・1と16に「小脰(ウ)通り」という用語がみられる。たたら炉内部底面の長辺中央部に位置する部分(「仲板」を置く位置)を指しているようであるが、今のところ類例を見出せていない。なお「脰」については偏が「彡」ではないかとも考えられる(「猿」の異字体)。

(表紙)

「元文中

鉄山仕法書写」

鉄山方諸用

1

一六ツ吹鑪、広サ凡拾壹間四方、高サ式丈三尺計り、但シ是二而八ツ吹も成申候、床深サ四尺計り、長サ壹丈、床之両脇二小舟有、此深サ五尺二も六尺二も仕候、前々八小舟と深サ同事二六尺二致候得共、小舟も床之深サ壹尺五寸も浅ク候得者、小舟之火勢床へ能移り候様二覚申二付、近代八床浅ク仕候

但小舟と床之間二小かべとて石垣二仕上ケとめを土二而ぬり申候、尤小舟之両脇も石垣也

小舟之広サ二尺有、長サ壹丈也

一新鑪火舟焼候事凡三十日計二而かまぬり申候、若シ水氣有之様二見へ押立之きわへふけ出候得者、鑪之軒きわ随分深ク堀申候、其上二而もとまり不申候得者、鑪之底深サ八尺二上<sub>方</sub>下<sub>へ</sub>大ニ水ぬき堀り候事あり

一鑪六ツ吹かま、長サ八尺五寸計り、幅三尺五六寸、高サ三尺七寸也、幅三尺五寸之内、小脰(マツ)通りとて内法之幅四寸又八五寸にも、大工之心持二より仕立申候、夫故かま之厚サ凡壹尺五寸ツ、有之候得共段々吹申内二広がり、さめ申節八内広クかま薄ク成り申二付、外へかまたおれ申事有之候故、かぎ拵置明朝さめ候、今日<sub>方</sub>掛ケ置候事も有、釜之高サ三尺七寸之内、壹尺五寸計り元かま土計り二而ぬり、其上を式割とて元かま土と上かま土とませ合少ぬり、其上<sub>方</sub>上かま土計二てぬり上ケ申候、但かま之口少シつばまり候様二ぬり候得者炭之減り少八無少候様二被存候得共、夫も大工之心持次第二て少宛之違有之候

一元かま土大事之義二而候、是者段々見立様有之事二候得とも口伝有之事二候

一六ツ吹きろ竹吹子壹挺二付六本宛也、四ツ吹八七本、劔押八八本宛也

一四ツ吹并二劔押鑪かま又八諸色拵、右六ツ吹二応シ申二而八無之候得共、少宛八少ク成り申候

一吹炭之事、鉄壹駄二付八拾貫<sub>方</sub>九拾貫<sub>方</sub>迄入

申候、時節二方亦八大工二方百貫目迄も入申事有之候、一日二鉄拾駄カ壹太平シ二吹候得者、炭八大方千貫目宛吹申候、夫故六ツ吹八毎日一かまツ、出し申二付、山子拾五人抱置、壹人前方一ケ月二二かま宛出させ申候

一元かま土之事、六ツ吹壹かま二三十太宛と申候得共、大工心持二より仕返シ土をも取り始末能候得者、式十四・五太二而八ぬり申物二候

一六ツ吹二大工壹人、炭坂壹人、跡押貳人、ノ四人也、但大工扶持一日二式升四合宛、賃銀一ケ年式拾枚宛也、前々八六百目宛二而候得共、近来廿枚宛二成候由、炭坂扶持式升壹合、賃一ケ年二拾枚ツ、右同断、跡押扶持壹升八合宛、賃壹ケ月拾五匁宛也

一四ツ吹大工壹人、炭坂壹人、跡押壹人、ノ三人也、扶持八右同事、賃銀者大工一ケ年六百目、炭坂壹ケ年三百目、跡押一ケ月拾五匁ツ、也

一 劔拾五枚大工壹人、炭坂壹人、跡押壹人、ノ三人、扶持八右同事也、賃銀八大工八劔壹枚二付式匁、炭坂壹匁

但拾枚押之時八跡押なし

一 鉄砂洗并負入、六ツ吹鉄押八貳人、四ツ吹并劔押八壹人宛、扶持九合、賃壹ケ月拾式匁方拾五匁迄見合有之事二候、一人役二人役二而受取申仕事之様二候得共、能もの八鑪之炭鉄砂始末能候得者、賃も上賃遣候

一 劔かま土之事、山之尾先二有之候赤土成程よわきが、かま之ね能くれ候て劔はゞ広ク成候故能候、然レ共流レ申土八吹ケ悪敷、其上劔之上二土とり堅ク付候而あしく候、流レ不申よわき土能候

## 2

一 山子、六ツ吹拾五人、四ツ吹拾人二極候事能候、六ツ吹八一日二凡鉄拾壹太ツ、吹申候、炭凡九拾貫匁宛吹申二付一日之吹炭千貫目、一釜之出炭凡千貫目宛出申候、夫故六ツ吹一日二一釜宛壹ケ月二三拾釜吹申候、此炭山子拾五人二而仕候得八壹人前壹ケ月式かまツ、二而候、一ケ月二一釜出候得者心安ク出合申候、四ツ吹八一日二鉄八太宛吹申候、此吹炭七百式拾貫匁ツ、一ケ月二式万千貫目二而候、山子拾人二而仕候へ

八ヶ月二かま一步ツ、二而候、是も右六ツ吹  
二応し申候

一 山子之義右之通り一ヶ月二かま宛仕候得八、一  
かま二山子拾五人役ツ、掛り申候、一かま之木  
凡八・九人役二而伐り揃申もの二而候、四・五  
人役八炭出シ又八釜小ふしんかたく二掛り申  
候、夫故壹ヶ月二かま出し二積り山子極メ置  
候得者、木伐掛人と申八遣シ不申候、木寄せ人  
八山二右所二右見分之上、或八一釜二拾人廿人  
卅人遣し候も有之候、尤伐り子相煩候か又八外々  
入用二遣候節八其釜之伐木出来不申故、木伐り  
掛人遣し候得共、是八山子之借り人二成、手替  
り二差引致シ、或八未進二成候得者、一人役銀  
壹匁ニシテ座方帳面ニ出し申候、過上二相成候  
得者右同事ニいたし山子二銀不遣候、山子煩も  
無之手代りも不仕候而、一かま十五日ぶり木得  
伐揃不申候得者無情<sup>精</sup>ニ而候、吟味可致事

一 伐り子氣二入不申候而隙遣し候節、炭未進有之  
候得者百貫目ヲ銀壹匁四分宛ニいたし、座方帳  
面ニ付出し申筈二候、過有之候ても同事ニいた  
し銀遣し候事、此訳八炭百貫目ニ而十分一壹匁

四分ツ、取居申候故右之通ニいたし候、座方二  
而取戻し申積り故如此二候、過者炭百貫目を以  
鉄吹候得者、十分一壹匁四分取申筈ニ而候得共、  
隙遣し鉄吹せ不申故、銀ニ而遣し申道理ニ而候

一 山子扶持一日二壹升八合宛也、劔押も同事也

一 山子賃銀とシテ出炭相改、炭高ヲ以此度之鉄八  
たれか吹鉄と名付吹二而、其鉄壹太二付銀壹匁  
四分ツ、十分一とシテ遣候、尤其鉄之吹炭八其  
者之出炭ニ而差引仕候

一 右十分一前々之極、此度極直し候事

鉄壹太二付十分一銀壹匁

鉄六拾太二付いほ壹太、此代拾六匁

平シ壹太二付式分六厘六毛二当ル

鉄六拾太二付めをれこま<sup>力</sup>銚

三貫目此代壹匁八分

壹ケ年そふつ代拾五匁

但七月二五匁、極月二拾匁

同よき才賃拾匁

塩代壹年三匁六分

但一日壹厘ツ、也

×此通り前々右遣し来り候所、此度相改、

銚壺太二付壺刃四分宛卜極遣し候、此壺  
刃四分之内二前々<sup>ら</sup>遣し来り候物不殘籠  
り居申候

右之外二銚壺枚二付洗米壺升宛山子へ遣又  
一 刃拾五枚押山子之義八人・七人二テ前々仕舞申  
候、是八一枚二付吹炭凡八百貫目入申候故、一  
ケ月壺万式千貫目吹申候、一かま千貫目宛出シ  
十二釜二而候故、山子七人二而も壺ケ月二釜<sup>ら</sup>  
八内二合申候、然共立間なく鉄折之内も吹詰候  
得者、山子無少候而者かま山鉄折手支申候故、  
鉄折のため近代伐り子十人之極置候、七人二而  
仕舞申候筈之所、十人二いたし置候へ共、一釜  
二十五人掛り申処、廿人役宛山子釜山へ参候様  
成候二付、銚押と八木寄せ人<sup>カ</sup>一かま五人ツ、  
無少遣候、尤十五枚押七人二極置候得共木よせ  
人銚押なみ二遣候事

一 刃拾五枚押山子賃銀として十分一銀刃壺枚二付  
拾六刃五分也

右十分一前々極り之趣、刃壺枚二付十分一銀  
拾五刃ツ、一ケ年そふつ代拾五刃、同よき  
才拾刃、同塩代三刃六分一日壺厘ツ、右之

通遣し来り候処、此度相改刃壺枚十六刃五分  
と極置候、此拾六刃五分之内前々遣し来り候  
物不殘籠り居申候

右之外二刃壺枚二付洗米壺升ツ、山子へ遣又  
一 刃拾枚押伐り子六人、但鉄折之内鑪立間いたし  
山内中刃折二打掛り候極り八、木寄人として釜  
山善悪二かまわす山子壺人前二ケ月掛人七人  
宛遣し候、其外何程掛人遣候而も山子之買人二  
而候、其代り二刃いほ打つほ之灰山子へ遣し候、  
但鉄折仕舞之節ゑり分ケ、坪毎二成り候分八壺  
太二付四拾目宛、地鉄いほ八壺太二付三拾刃  
ツ、二買取り、其外坪之灰八山子之名付札さし  
小屋二預り置、打鉄仕候節相渡シ、但いほうち  
坪灰之内二而も細刃湯下二而も可成分八小屋へ  
召取り申候、尤前々八いほ打つほ之灰共二山子  
之所へ取り帰り置候得共、山子之手前二持せ置  
候而八鉄類みたり二成候様二相見へ申二付、近  
代少しも山子二持せ置不申候、当分く小屋へ  
預り置候事

一 刃拾枚押二而も十分一八拾五枚押同事二候、手  
代り掛人、銚押并刃拾五枚押八山子一人ヲ一人

半二いたし遣候得共、拾枚押右之極八山子之掛  
人一人を其俣一人二立申候事

### 3 劔折之事

一大折拾四人掛ケ申候、劔能候得共一日拾枚九枚  
程折申候、劔悪敷候得共一日二廿枚も折又八五  
枚三枚ならて八をれ不申劔も有之候、鉄どう重  
目六拾貫匁を七十貫目迄有之能候

一小折拾六人を式拾式人迄掛ケ申候、石之大小二  
を申事二候、同じく者拾八九人位掛ケ候得者か  
つかふ能候、劔能候得者一日二壱枚ツ、折申候、  
悪敷候得者五枚七枚もおれ申事有之候、折鉄か  
ぢ鉄計り二成候得者、細か二折不申候故はかど  
り申候

一鉄どうからけ式人役、但石之とも同事  
一劔つくり壱人炭能ほり割レ居申候、劔を其俣置  
不申候様能打はなし、今一ツ折候得者能劔二成  
申候と目利仕らせ申様成、功者成ル者付可申事  
一劔折奉行同前二壱人、劔つくり場二二人三人置  
候事能候、但どう前之一人之奉行少用事二出候  
とも、劔作り場を手代り二可参事、少二而も油

断有之候得者盗申事有之候

一劔折有之内八毎朝六ツ二折場へ出、晚八日暮た  
いまつとほし候て仕舞可申事、尤掛人共情出し  
能折申日八早ク仕舞候事翌日之ため能候、但シ  
情出し申日八酒なともたへさせ候事、此方之勝  
手二成ルたはこ吸候節、気を付不申候得者大分  
違申候

一石之どう焼候事、所二を石不自由二候得者土之  
下をほり出シ又八大石やき割り申候故、どう壱  
ツ廿人役も掛り申候、石沢山二候得者五人三人  
役二而も出来申候事

### 4 番子之事

一六ツ吹一日二拾式人宛、賃銀一ヶ月三拾六匁を  
四拾五匁迄、扶持米一日九合宛、外二三合夜喰、  
但籠り八朝八ツを仕掛ケ仕候故夜喰遣し不申候、  
尤仕掛ケ致吹四斗さし候得者籠り二も夜食遣し  
候、番子二日分廿四人有之候得八能箆二候得共、  
病人何角二而一人前一ヶ月十五人宛八得詰メ不  
申故、三十人無之候而八手支申候

一四ツ吹・劔番子一日二八人、賃銀一ヶ月拾五匁

右拾八匁迄、但これ八ぬり仕立二日一夜ヲ三人  
二立申候故、賃銀下直二候、扶持一日九合夜ル  
之分八外二夜食三合遣ス、尤劔壹枚分番子廿四  
人役ヲ八人二而相勤申候、番子不自由二候得者  
十人十一人二而も拾五枚押相勤り候得共、左様  
仕候得者仕事詰申候故鑪二而不情<sup>精</sup>二成申二付、  
十六人抱置候事能候、折く銑押も可仕ため二  
八劔押二而も番子廿人抱置、釜山へ遣又八小炭  
やかせ候勝手能候

一銑押かまぬり之節、十式人ノ番子之内灰手子仕  
と申し、床之灰作り申もの四人八賃扶持之外二  
灰手子賃と申、一人二五分宛遣し候事、右拾二  
人之内四人八灰手子二成り、式人八土場へ掛り、  
六人灰打申候、此六人二しなへ六本小屋を相渡  
ス、但小屋二伐らせ置入用次第二遣し候得者大  
分遣申故、一本二付壹分宛二相極、鉄一枚二付  
六分宛灰打申番子二遣し申候

一鑪二遣申桶八小屋を出し申、輪替も小屋をいた  
し候、かつら玉くるま灰炭、此三色山子伝役出  
し候、劔山之鉄打之手木も山子を出し候、うと  
かぎノ系八番子中伝役二出し候

一劔山どう石鑪へ引付ケ候義、山中伝役二取よせ  
申事二候

一劔山上かま土八番子共負入り候而かまぬり申候、  
但し土ほり申八本主堀申候、尤上かま土遠方二  
而候得者番子得負入不申故、其代り二てらし式  
荷三荷宛、山二を四荷ツ、もとらせ申候事

一劔山どうからけ申かづら八藤かづら也、所二を  
一人役二壹荷ならて八得伐不申候、山二を二荷  
も伐申所も有之候

一問炭負之事、かまを鑪へ凡拾丁計り有之候得八  
壹人役百貫目宛負申候、然共負上ケ之所八左様  
二得負不申、負下ケと負上ケ又八場所二を不余  
候、見及之口伝有、山子木寄人見及遣し候も同  
事二而、委細二記候事難成候

一問炭負賃銀一ヶ月拾五匁、扶持九合也  
附り問炭正味<sup>之</sup>二仕様

一百貫目釜ヲ四拾貫匁負申候

是二八ヲ掛ケ正味三拾貳貫匁と成ル

一八拾貫目釜ヲ四拾貫匁負申候

是八其俣すくみ二成ル

一六拾貫目釜ヲ四拾貫匁負申候

是八六二而割、八ヲ掛ケ正味五十三貫二百目  
二十ナル

一 四拾貫目釜ヲ四拾貫目負申候

是八四二而わり八ヲ掛ケ正味八拾貫目二十ナル

一 式百貫目釜ヲ四拾貫目負申候

是八二二(マ)而割八ヲ掛ケ正味拾六貫目二十ナル

あら炭メ式百貫目

此正味メ式百六拾壹貫目

此役三人式部(分)六厘二成ル

但シ正味炭八拾貫目ヲ一人役と極置候故、何

百貫目負申釜二而も其負炭ヲ其極り之貫

目二而わり、夫二八ヲ掛ケ候て正味とい

たし置差引仕候時節、役二直し候得者正

味之高ヲ八二而割何人役と見申候事

但土二而も同事也

一 土碎之事大方壱枚ぬりヲ六人役二而碎申候、然

レ共土二ち白石多クつがり無之症つよき土八、

八人十人もかけ候而碎せ不申候得者かまよわく

候、石無少症ひよわき土ノねばり二而二日押も

成申様成ル土八、四人五人二而碎せ候而も不苦

候

5

一 炭釜大サ、横広キ所二而式間壱尺、長三間式尺

二 極メ申候、山中大小無之様二吟味いたし打せ

可申事、かま大キ成ル八炭之やけ様悪敷候、然

共少ク候而八出炭無数損二而候、右之寸法二而

千貫目宛出候様二焼候得者炭も能候、出炭鑪付

凡十貫目二付六分宛二あたり候様二いたし候事、

中くらい二而候

一 炭焼様之事、たとへ八朔日二釜立二日二たき付

七日二籠申様二やき可申候、尤炭急キ候節八釜

立申夜たき付候て、右二一日早く籠可申候、但

シ障子せばめ又八嵐穴もせばめ候而しめやき二

いたし候得者、貫目多ク出候得共其炭八鑪二而

へり多ク候、障子又八嵐穴もせばめ不申あらや

き二いたし煙氣無之様二成候て、一日か又八一

夜かさや(マカ)し候て、其上二而籠候へ者、たとへ炭

少し八無数出候ても鑪二而へり無数候、其上吹

ケ能候、しめやき二仕、未煙氣も有之二籠候へ

八もと炭有之物二而候、しめやき二いたし元炭

無之様二やき候得八日数多ク掛り申候、尤炭之

色二而も見知り申事二候

一釜山木寄せ人極メ遣し人夫之多少ヲつよく致吟  
味候得者、炭之無数出候事ヲ不構、木たけミし  
かく切申事も有之候、炭無数出候ハ、木たけ之  
吟味も可仕事二候、木たけ短ク切候得者、各別<sup>格</sup>  
よせいたし能候得共炭無数出申候

一裏炭二打込候炭、古来八三つめ之堅炭と好ミ申  
由二候得共、三づめ八火持悪敷火切申事有之候  
二付、近来八ぶなほしそのやわらか成ル木ヲ堅  
クやかせ裏炭二仕候、此炭もしめやき二いたし  
火だり不申八堅ク候てもあしく候、能火たり候  
て堅キ炭能候事

## 6 六ツ吹鉄山人夫抱様之積り

一大工壹人、炭坂壹人、跡押貳人、山子拾五人  
ノ拾九人年中詰役之もの也

外二

一番子四千百六拾四人

一日拾貳人ツ、

但年中日数三百五十四日之内七日八正月益之

立間二引、残り三百四十七日也

一鉄砂洗入六百九拾四人

一日貳人ツ、

但右同断

一土碎四百貳拾人

一枚二付六人ツ、鑪小ふしん共

前二くわしく有

但年中三日押七拾枚也、若二日押四日押抔

有之候ハ、其心得可仕候事

てらし

千七百五拾人

小舟たき

三日押壹枚二付廿五人ツ、

但シかまやき小舟木鉄砂やき木共

一間炭負 三千四百七拾人

但一日二千貫目宛吹、一人役百貫目ツ、二而

入ル積り、山ニお炭入百貳拾貫目ニも成候

か又八八拾貫目ニも成候ハ、其心得可仕

候事

一釜山木寄人 六千九百四拾人

但年三百五十四日之内七日八正月益之立間二

引、残り三百四十七日吹日也、一かまつ、

出シ一かま之よせ人廿人ツ、之積り也、山

ニお十五人ニ而よせ候か又八廿貳人も入候

八、其積り二可仕候事

一土之口 千四百人

一日四人ツ、

但年中三日押七拾枚ぬり、此土貳千百太とし

て一人分壹太半ツ、取申積り也、若又二日

押致候得者土多ク入申候、四日押致候得者

土無数入申候、山二方土取能候へ八一人役

二貳太ツ、も取申か、又八山あしく一人役

二壹太ツ、ならて八得取不申候八、其積

り二而人夫差置可申事

一小屋遣 三百五拾人

但薪たい松小屋諸色

一山内かし人 三百五拾人

九口ノ壹万九千五百三十八人

此人数六拾五人

但壹ヶ月壹人前廿五人ツ、

壹ヶ年二三百人役ツ、仕候として

尤此内二子供有之候八、廿人ヲ十人二立

可申事

此内 三拾人

番子

貳人

鉄砂洗入

四人

土之口

十人

炭負

十九人

かけ人

ノ六拾五人

如此心当召抱可申候、乍然釜山二而も何二而も

右之積り方八山二方多少可有之候、番子貳拾四

人二而勤候所三拾人抱置釜山二も遣、てらし土

めき二遣可申事

右之外二新かま打申人夫、年二方山二方毎年積

り候八、召抱可申事

右八六ツ吹之積り也、四ツ吹も右之積りを以人夫

召抱可申事

7 右六ツ吹壹ヶ年入用積り

一米貳拾八石六斗七升四合

三百五十四日、一日二八升壹合ツ、

職人四人

一同九拾五石五斗八升

三百五十四日、一日二貳斗七升ツ、

山子拾五人

一同三拾七石四斗七升六合

三百四十七日吹日、一日一斗八升(合方)ツ、

番子一日拾式人

一米三石式斗七升

三ツ押七拾枚分、一枚二付四升六合ツ、

番子一日拾式人

夜食之分

一同六石式斗四升六合

三百四十七日吹日、一日壹升八合ツ、

鉄砂洗入式人

一同百三拾式石壹斗式升

土めきてらし間炭負釜山よせ人

土之口小屋遣山内かし人共

〆壹万四千六百八拾人

一同拾三石五斗

新釜人千五百人、凡毎年拾枚ツ、打替ニして

一同式拾石 小屋扶持

〆三百六拾八石壹斗六升

右七拾目平シ

代式拾五貫七百七拾壹匁式分

一同五貫四拾目 山子拾五人

年中吹鉄三千六百太十分一諸色共

但一日拾壹太平二仕候得者、三千八百太余二

候得共、年中拾壹太平シ二而参として

一同六貫三拾七匁八分 番子四千六百六十四人賃

平シ四拾三匁五分ツ、として

一同三百四拾七匁

鉄砂洗六百九十四人

一同壹貫七百三拾五匁

間炭負三千四百七拾人

一同五貫式百三拾壹匁  
式分四厘

土碎てらし釜山  
木寄せ土ノ口小屋遣  
山内かし人

壹万千式百拾人

但し平シ 十四匁として

一同七百目

小屋遣

一同式貫目

諸色入用

一同五拾四貫目

鉄砂壹万式千太

但し一太二付四匁五分ツ、として

鉄壹太二付三太三歩

〆百式貫五百拾式匁式分四厘

外二

九貫目

運上銀

一銀壹貫六百五拾目 職人四人賃銀

式貫目 土駄賃

此二口山ニおしれ不申候得共

凡如此

合百拾三貫五百目余

此銑

三千六百駄

平シ壹太二付

三拾壹匁六分二当ル

右八六ツ吹鑪方入用積り也

かけ人右積り之通りニ而仕廻候得者、此外入用

八無之候、掛人吟味可仕候事

8 右六ツ吹鍛冶屋積り

一鍛冶拾貳人

内

拾壹人

千割

中割

此地鉄 三千百六拾八太

但一ヶ月一人前式拾四人役ツ、

壹人

長のへ

此地鉄三百八十四太

但一ヶ月廿六人役

壹人四拾貫匁ツ、

二口合三千五百五十式太

内

三千六百太 右二在壹ヶ年

吹銑

残而四拾八太

銑二而出し可申事

内拾式太

小仕事地鉄二成ル

如此相心得、六ツ吹八鍛冶屋拾式軒召抱候事

能候

一 地鉄三千五百五十二太 鍛冶拾式軒二而遣筈

代百拾式貫貳百四拾三匁式分

出来口平シ三拾壹匁六分かへ

一 銀拾貫五百六拾目

中割

鍛冶

小割

三千百六十八人

但一ヶ月百匁ツ、

一同七百八拾目

長延鍛冶

三百拾貳人

但一ヶ月七拾五匁

一同拾壹貫貳百貳匁八分 中割手子

壹万貳千六百七十貳人

但一ヶ月廿七匁ツ、

一同八百七拾三匁六分 長延手子

千貳百四十八人

但一ヶ月廿一匁ツ、

一同壹貫七百四拾目 後吹三千四百八十人

但一ヶ月十五匁ツ、

一同三百八拾壹匁六分 小仕事鍛冶七十貳人

手子貳百八十八人

但鍛冶屋壹軒二付

六人役ツ、小仕事仕候

一米貳百拾貳石四斗 右之役数

七拾目かへ 貳万千貳百四十人

代拾四貫八百六十八匁

一銀壹貫貳百六拾七匁貳分 銚三千百六十八太

下ケ賃一太四分ツ、

一小炭七拾九石貳斗 銚三千百六十八太

一太二付貳升五合

一同拾五石八斗四升 右之銚下ケ炭

一太二付五合

一同七石八斗 長延三百拾貳人

壹人役下鉄四拾貫匁

二而貳升五合

一同壹石四斗四升 小仕事七十貳人

遣炭壹人役貳升ツ、

四口合百四石貳斗八升

代貳拾貫八百五十六匁

平シ貳匁ツ、として

一銀三百七拾九匁壹分 小仕事地鉄

十式太代

壹軒壹太ツ、

一同三百五拾五匁貳分 羽口三千五百五十式本

但し鍛冶一人役壹本ツ、壹本二付壹分ツ、

何本遣候而も一人役壹本ツ、

一銀六拾九匁六分 たかね塩三石四斗八升代

但本何事一人塩壹合ツ、

一同七拾匁八分 右役数貳万千貳百四十人塩代

但三十日二壹分ツ、

一同貳貫目 諸色入用

一同壹貫目 手子共下ケ銀

合百七拾八貫八百四拾九匁壹分

内

長延貳百九拾貳太 壹人役正味三拾貫匁ツ、

代拾九貫<sup>(七カ)</sup>五百廿匁

但鉄山二而出来口六拾匁二当ル

中割

小割 貳千貳百拾八太

鍛冶役数三千百六十八人

正味壹人二付貳拾貳貫四百目二して

代百六拾壹貫三百廿九匁壹分

但出来口山二而七十貳匁七分四厘

右

荷数ノ貳千五百拾太

但し壹太二付山方大坂迄

駄賃諸色七匁計り掛り申候

右之内大坂二而売口之積り

一長延貳百九拾貳太

代拾九貫九百七十貳匁八分

一中割貳千貳百拾八太

代百八拾六貫九十三匁

二口ノ貳百六貫六拾五匁八分

内

百七拾八貫八百四拾九匁壹分 入用前二有分

拾七貫五百七拾匁 山方大坂迄賃、諸入用

ノ百九拾六貫四百拾九匁壹分

残而九貫六百四拾六匁七分

一米千五拾石

壹年入用高

内

五百八拾石

鑪方鍛冶屋へ年中渡し米

残而四百七拾石 売米也

此利四貫七百日

石二付拾匁高払

一売物高三拾貫目

此内七貫目

利有

一山内打鉄百三拾太買取り

代三貫九百日

元銀

九百拾匁

山方大坂迄入用太ちん

ノ四貫八百拾匁

元払

此売、六貫五百目

残而壹貫六百九拾目 利有

利四口

合式拾三貫目余 六ツ吹壹ヶ年利也

是二而八元銀二割二八合可申候と被存候

右者

米直段 七拾目かへ

小炭直段 貳刃かへ

鉄砂直段 貳刃九分かへ

同太賃 壹刃六分かへ

四刃五分 山着

出荷太賃 四刃五分 山崎迄

土太賃 壹刃

御運上 貳百枚

鉄砂洗<sup>(銚力)</sup>太二付三太三歩二して

一ヶ年中ノ吹銚三千六百太二して

此鉄不残割鉄二して

米千五拾石払、此内五百八拾石鑪かぢや遣捨、

残四百七拾石売米二して

かま山かけ人一かま廿人役ツ、二而よせ立仕

舞

炭入一人役二百貫目ツ、負

出炭一かま千貫目ツ、出し

吹炭銚太二付九拾貫目ツ、二して

諸色入用山内下り銀とも五貫目二して手代給

銀共

小屋遣 米貳拾石銀七百目二して

かけ人三百五十人

薪松取り諸方遣共

かけ人 壹万三千四百人

新かま共々遣

此外八職人、山子、番子、間炭負、小炭、鍛冶、

手子、此類八定り有之事二而候得者、此所へよ

せ申二不及候、とかくかけ人二目付有之事二候

如此二而右之積り也

たとへ八

米拾刃下直二而六拾刃平二成候得者、五貫八

百目出ル

但売米八元下直二成候得者、売下直二仕候

故、不構払捨候米計り也

鉄太二付五刃ツ、上り候得者、拾貳貫五百

目出ル

出荷太賃山二方壹刃ツ、下直二成候得者、貳

貫五百目出ル

鉄砂太賃山二万五分ツ、下直二成候得者、六貫匁出ル

鉄砂元五分ツ、下直二成候へ者、六貫匁出ル  
掛人壹万貳千人二而仕廻候へ者、壹貫四百目出ル

出銀六口ノ三拾四貫貳百目徳用二成積り、左候得者右之積り二而貳拾三貫目有、其入用之内ハ三拾四貫匁又仕出しも可有之候

二口合五拾七貫目二も可成候と被存候  
然共又前々積りよりもかけ人多ク遣、吹鉄も不足二成、其上割鉄二不成銑二而出し、炭入も遠候而百貫目二而不入、諸入用も五貫匁二而不足仕、米も高直二成、鉄も下直二ヶ様之義共有之候得者、其積りヲ以御運上積り可申事

9

一古来八間炭負と申者無之候、拾貳人之番子共替るノ二炭負入鉄吹申候、吹差申間々二炭負申とて間炭負と名付申候、其節八番子賃金も上八三拾六匁遣候、然共番子二炭負せ候而八休三申候間無之、一日一夜詰申事二候故、吹差候砌手

ぬるく風よわく候故、荷数無数候二付、炭負別二人、番子八吹差申計之役人二相極メ風之吟味仕らせ申候、然共中古迄一日二九太わき申事稀候、段々職人番子又八炭之焼様吟味重り、近来拾壹太ならしわき申候、時節二より十式太もわき候事有之候得共、夫八折々之事二候、番子賃銀之義段々少ツ、増候而、近来八下三拾八匁二上四拾五匁ツ、遣ス

一職人賃銀も古来八六ツ吹、大工六百目、炭坂三百目之事有之候へ共、其後式拾枚拾枚二成候、扶持八替儿事無之候  
一掛人賃銀古来八上賃拾三匁二而候処、山ノ大キニ罷成、人不自由二成、旁以次第二増候ハ、近来上拾五匁上々ハ外二よき才賃年中二五匁六匁或八式匁三匁宛遣候

一鍛冶賃銀古来八千割上九拾匁二而候、下八六拾目も有之候、中古上八百拾五匁遣候、近来改上百五匁二仕候、是八常々割鉄之上中能見届置、算用之節正味平シ見合、常々割鉄能候而も正味平シ悪敷候得八中之賃遣候、割鉄能正味平シも能候得八上賃遣し候、正味平シ能候而も常々割

鉄悪敷候得八中之賃二成申候、割鉄も悪敷正味平シ無数候得者下々ニ而候、下手鍛冶八賃銀下直ニ而も未此方之損ニ而候故、同じく八上手計ニ上賃遣抱置申度候、惣而番子かけ人も其心得ニ而候、然共物每上手計八大分無之候故、下手も乍損抱申候、夫故鍛冶職人山子かけ人番子等ニよらず上手八目ヲ掛遣可申事

一手子前吹差、古来八千割七分ニ而候、其節八銚直段能候故、鍛冶大分遣不申候二付手子なとも賃下直二候、中古ち銚直段下直二成り、鍛冶屋ならて八合不申故、賃銀八分ツ、二極申候、其後奥溝谷山之節、中割初而仕候、是八千割よりも数多ク仕候故、手子ども大儀成ル仕事之由ニ而中割九分二仕候、それ故中割はやり千割中絶仕候、重而千割も少八いたし度と申候節、千割手子も九分ならて八不仕候様罷成り、只今中割千割共二九分宛ニ罷成候

一長延打鉄并小仕事手子吹差、古来八六分二而候処、千割八分二成候節、是も七分二成、今二七分宛ニ而候、後吹八古来ち今に五分宛ニ而候

一鍛冶屋方扶持、古来八九合扶持ニ而候処、鍛冶

屋大分遣申、鍛冶手子供ニ不自由ニ付賃銀八分ニいたし候節ち升扶持ニ相極メ、只今ち升宛也一 小炭之事、古来八遣捨ニ而候得とも始末無覚束故、中古ち極遣候

一 千割中割三拾貳貫匁ニ而ち升五合、銚ニ而仕候時八銚ち太之下ケ炭五合

一 長延大千割類四拾貫目ニ而ち升五合、銚ニ而仕候節八銚ち太二下ケ炭五合ツ、

一 小仕事一人役炭ち升ツ、

一 長割三拾貳貫目ニ而三升ち合

外ニ銚ニ而仕候節八下ケ炭五合ツ、

如此ニ極遣候、以後何仕事仕らせ候共此心得ニ而能候、但小仕事炭多ク候、向後減し可申事

一 長割鍛冶賃百ち拾目

但地鉄三拾ち貫目入

手子吹差五人也

賃ち匁ツ、

後吹五分

手子四人

吹差ち人

後吹ち人

鍛冶共二七人掛ル

10

一 小炭直段之事、山二より壹匁三四分ち貳匁四五分迄も極申候、然共伐入之山者悪キ山二而も大方壹匁五六分位二而候、後々段々直段上ケ申候、能山八伐り入大かた壹匁三四分五分くらいなり、及見有之事二候、悪キ心之小炭直段下直二而八やき手不参候故、鍛冶屋出来不申候得者却而損二而候

一 小炭籠之事、豎三尺横渡も三尺之籠壹升拵と極申候、豎三尺ヲ三寸宛二印いたし置、何合と改受取申候事

一 小炭蔵へ入候事、やわらかに而灰氣有之炭八大分へり申候故、たとへ八一升ヲ九合二取候事有之候、それ故蔵入二成候炭八堅キ木ヲやき参候、蔵二而取様あしく候得者大分欠立申もの二而候

11

一 山内ひらい鉄買取り候直段

細銚壹貫目二付 六分

いほ壹貫目二付 五分

上鉄壹貫目二付 貳分五厘

しめかね壹貫匁二付 貳分五厘

打鉄壹太二付 三拾目

如斯二相極候、細銚八度々二買取り、いほ・上鉄・しめかね八打鉄二させ候而買取候事能候、あら鉄二而取り候得者ませ有之故損二而候、尤細か成もの大分有之物故、悉吟味難成候

12

中割 千割 出来口積り

一 銚壹太代 三拾貳匁

一 三匁三分三厘 かち賃

一 三匁六分 手子吹差四人

一 五分 後吹

一 四匁貳分 右扶持六升代

一 四分 銚下ケちん

一 六匁 小炭三升下ケ炭共

一 壹分 羽口

一 壹匁貳分 諸入用塩代共

一 五拾壹匁三分三厘

此正味 七歩

七拾三匁三分余

外二七匁 山方大坂迄入用

八拾目三分二而大坂着

但山方山崎迄太ちん

四匁五分ノ所二而候

13 長延出来口ノ積り

一 下鉄四拾貫目 代四拾目

一 式匁五分 鍛冶ちん

一 式匁八分 手子吹差四人

一 五分 後吹

一 四匁式分 右之ふち

一 壹分 羽口

一 壹匁 諸入用

一 五匁 小炭式升五合

八五拾六匁壹分

此正味三拾貫匁

平し五拾九匁八分四厘

外二七匁 山方大坂迄入用

六拾六匁八分四厘

14 大千割出来口積り

一 下鉄五拾五貫目 代五拾五匁

一 式匁五分 鍛冶ちん

一 式匁八分 手子吹さし

一 五分 後吹

一 四匁式分 ふち

一 壹分 羽口

一 五匁 小炭式升五合

長のへ四十貫匁二而式升五合

大千割五十五貫匁二而同断

長のへ八平し仕候、大千割八平し不仕候、切は

なし申迄二候故同事二相極、銚二而仕候節八下

ケ炭八合遣候

一 壹匁 諸入用

八七拾壹匁壹分

此正味 四拾四貫匁

平し 五拾壹匁七分一厘

外二七匁 大坂迄入用

八五拾八匁七分壹厘

一古来之劔山拾枚押也、此山之人數大工、炭坂、山子六人、番子八人、~~八~~拾六人、山内二是計り居申候、掛人八少も置不申候、自然二能もの八一人も置候事も有之候得共毎日八仕事無之様二候、鉄砂洗直し不仕候、炭八番子共負入申候、右拾六人之人計故、鉄折二八立間いたし山中打掛り折申候、夫故鉄折之人大折二八大工炭坂除キ其外皆掛り申候、小折も山子番子十四人どう柄二炭坂、劔作り二大工掛り申候、其節八劔山三ヶ所四ヶ所二鍛冶寺人居申候て、山々廻り候て下鉄かぢ鉄ヲ割鉄二仕候

右八古来<sup>右</sup>之定法也

近来之仕様左之通

16 四ツ吹山

一四ツ吹鑪凡九間四方、高サ四広<sup>カ</sup>壹尺、是二而六ツ吹も成申候、床深サ四尺、長サ三間、尤床之兩脇二小舟有、深サ五尺五寸二仕候、床と小舟深サ同事二致候而も小舟<sup>右</sup>床之深サ一尺も一尺五

寸も浅ク候得者、小舟火勢能うつり候様二覚申二付、近代八床浅ク仕候

但小舟と床之間石垣二仕候、其目ヲ土二而ぬり申候、尤小舟兩方へ広サ一尺七寸有之、長サ本床と同事、惣下石ヲならへつり申候、水氣有之所八本床下水ぬき致し候、押立廻り深サ八尺程二堀ぬき致候事能候

一新鑪床やき凡廿日計り二而かまぬり候得共、近年之様子見及候所少二而も日数多クやき候事能候、三十日八是悲<sup>非</sup>やき候積二可仕事

一裏炭ぶなほし<sup>カ</sup>少し堅き炭つめ申候、裏灰あつさ一尺一二寸、ぶな炭宜敷候、灰氣有之節八、しいなひうつ木たき灰仕候

一鑪釜長サ七尺、横三尺五六寸、高サ三尺七八寸、は、三尺五寸之内小脰<sup>カ</sup>通り四五寸又八三四寸、大工之心持二より仕候、釜高サ三尺七八寸之内壹尺式三寸元釜土二而ぬり、其上ヲ二割とて元釜土二上かま土ヲまぜぬり、其上ヲ上かま土二而ぬり申候、釜之口上二而少しつばまり候様二ぬり候得者、炭之へり少八無数様二存候得共、是も大工之心持次第二而少宛之違有之事二候

一天秤八四ツ吹きろ竹拾四本

一四ツ吹大工壹人、炭坂壹人、跡押壹人、ノ三人

一元小屋寸法、行八間半、横三間、外二半間ツ、

下仕候奥六畳台所、三間四方千割場十ヲ二仕切、

下モノ方一尺五寸計残し置、此所ニ米ひつ置申

候、但地上壹尺、尾立一尺五寸

一鍛冶屋寸法、行六間、横式間四尺、地上八尺、

尾立三尺、是八二軒立寸法也

一山内小屋、行六間、横式間壹尺、地上六尺、尾

立八尺、是八小屋式軒居也、一軒二仕候得八三

間半四方二仕候

一鉄砂場、長サ拾式間、横四間、前方八表之方も

石垣二仕候得共只今八木二而すたち二仕候、内

石垣二而上手も木二而皆木二而すたち二仕候、

下八土二而能ぬり申事よく候、常之土二而八鉄

砂下へずり込候間、此所念入可申事、洗流し候

ても仕舞山<sup>カ</sup>二取レ不申候

一樋長サ三間半、式寸五分壹間二而落申候積り、

是二而一度二拾太ツ、洗申候

17 四ツ吹賃定

一職人三人

内

大工壹人

銚拾太二付式刃三分

但鑪立間之節八鑪番として壹升ツ、遣ス

炭坂壹人

銚十太二付壹刃壹分五厘

但立間之節先年八扶持遣し候得共只今遣し不

申候

跡押壹人

月十三刃五分

一山子十分一

銚拾太二付拾刃五分

但シ休申共遣ス、本主之節洗米壹升遣し来候、

一ヶ年三百六十日之内正月三日七月三日

ノ六日休引、残三百五拾四日、鉄数二日

押八拾八枚半二而廿四太涌ニシテ吹銚式

千百廿四太、但し吹炭凡拾九万千百六拾

貫刃、銚壹太二吹炭九拾貫刃として出炭

七百貫刃、かま数式百七十三かま一ヶ月

二式十二かま七步二当ル、月平し一人二(式脱カ)かま式步七厘、此出炭千五百八十九貫匁、

但かま山算用之節八本主前千貫匁二付十

五人遣し申候、定人凡式拾式人位

但先年八伐り子伝役二松木とらせ候得共、

只今八たキ松木用二付、伝役に道具柄

致させ申候

一天秤番子

上月六拾四匁四分

中六拾式匁五分

下六拾匁五分

一差吹番子

上六拾七匁五分

中六拾四匁五分

下六拾壹匁五分

但扶持九合宛遣ス、夜食一人前二三合ツ、遣

ス、先年差吹之節八籠り夜三斗吹不申候得

バ、夜食遣し不申候得共、近年天秤二成り

其無差別遣し申候

一鉄数八拾八枚半、此番子千四百九拾六人、鉄壹

枚十六人ツ、一日四人として

一番子よき才一ヶ月式匁ツ、先年八遣し候得共、

只今八遣し不申候

一灰銀銀壹枚二付式人入申候、壹人二付三分三厘、

是八かまぬり申節灰いたし候もの也

一しなへ打鉄壹枚二六人入申候

一人二付壹分、是八灰しめ申もの也

一掛人

上月拾五匁五分

中拾五匁

下拾四匁五分

扶持九合也

但伐り子渡し人一釜二式拾式人、かま数式百七

十三かま、此人数凡六千六人、此外二諸普請

遣申候、新かま八掛切日用遣申候

一掛人よき才一ヶ月二三匁ツ、前方八遣し候

得共、近代八遣し不申候

月拾六匁五分

ふち九合ツ、

一間炭負

但出炭拾九万千百六拾貫匁、此負役千五百九拾

三人、平し一日二四人半役、但し壹人役一里

三拾三貫匁として一人役二百式拾貫匁、先年

八一里四拾貫目二致候而も四拾貫匁二而負上

ケ入申候得者負上ケなし、三十三貫匁と只今

致申候、但間炭ト申義八前方八番子共三替り

二致申候て、鉄吹間二番子共負来申候二付間

炭と申候、近年八二替りにいたし番子負申候

事相止メ、子供負申候

一掛切日用

上 壹匁貳分  
中 壹匁壹分  
下 壹匁

一鉄名地

上 拾四匁四分  
中 拾四匁  
下 拾三匁貳分  
ふち 九合

一鍛冶屋掛人

上月 九匁五分  
下 九匁三分  
ふち 九合

一老人

上 拾匁五分  
下 八匁五分  
ふち 九合

一すき

壹匁壹分

一鉄砂洗  
負入ル

月十五匁五分  
ふち 九合

18 鍛冶方

一 中割鍛冶

上 百拾五匁  
中 百五匁  
下 九拾九匁  
ふち 壹升

一 小割長延  
小千割打鉄

九拾五匁  
扶持壹升  
五拾七匁  
ふち 壹升

一 小仕事

但 中割六吹 四拾八本

小割七吹 五拾六本

中割貳拾五匁匁上

有之候得者酒壹升遣又

一 中割手子

壹匁三分  
ふち 壹升

一 小割打鉄

壹匁壹分三厘  
ふち 壹升

一 小千割長延

七分五厘  
ふち 壹升

一 小仕事

中割小割下小千割手子三人、朝吹致候もの  
鉄取申候、凡掛目四百目一軒二壹ツ有之もの  
二而候、五厘宛二小屋へ買取申候、但シ槌ノ

重目壹貫百目、長サ壹尺一二寸有之候

19 才道具

一 褒美銀手子貳拾壹人<sup>方</sup>廿三人迄壹匁、貳拾四人

一 大湯やり

七分

一 一<sup>方</sup>一日二貳匁宛、是二而貳拾四人仕候得八八匁

一 同はり直し

壹匁四分

取申候

一 小湯やり

四分三厘

一 後吹

七分、ふち壹升

一 同はり直し

壹匁壹分五厘

一 鉄下ケちん

五分五厘

一 大かき直し

五分七厘

一 羽口

壹分貳厘

一 鉄柄ふり才

壹匁一分五厘

但鍛冶壹人役二羽口壹本、大下ケ二八貳本遣

一 小同才

八分五厘

し申候、凡掛目三貫四五百目

一 程付才

壹分五厘

一 槌柄壹本

壹分貳厘

一 灰もそり

壹分五厘

一 小炭壹升

貳匁壹分

一 土砕才

七分

蔵入申小炭八蔵出し賃遣し申候、壹升二貳分

一 炭出し才

四分五厘

遣ス、是も遠近二より直違申候、一升<sup>枳</sup>八三

一 鑪釜<sup>(釘カ)</sup>つりかき新

四分五厘

尺四方之籠也

一 天秤かき才

三分

一 下鍛冶

九拾七匁五分

一 同くわん

七分五厘

ふち壹升

一 釜山<sup>(カ)</sup>かき才

四分五厘

手子貳人入、是八小割同事

一 大鉄付才

貳匁四分

小屋<sup>方</sup>本主壹人遣し申候、小炭見合也

一 どうかね

七厘

一 せんた目付

六厘

一 新熊手

壹匁四分五厘

一 同才

五分五厘

- 一 洗鋤才 三匁五分
- 一同 はり直し 四匁五分
- 一 長鋤才 六分五厘
- 一同 新 壹匁七分
- 一同 はり直し 壹匁四分
- 一同 才 四分五厘
- 一 根切よき才 壹匁四分
- 一 新よき 四匁三分
- 一同 はり直し 三匁五分
- 一同 本才 壹匁四分
- 一同 鋤才 壹分<sub>(匁力)</sub>五分五厘
- 一 才作り 七分
- 一 新 なた 三匁五分
- 一同 打かへし 貳匁八分
- 一 新飛口<sub>(匁力)</sub> 七分

20 四ツ吹人数抱様之事

一大工壹人、炭坂壹人、跡押壹人、伐り子拾人

是八年中詰役也

外二

一番子 千四百九拾六人 一日四人入

年中三百六十日之内正月三日七月三日<sub>ノ</sub>六日  
引、残り三百五十四日

一 鉄砂洗負入 三百五十四人

一日壹人ツ、

一 土碎 三百五十四人 一日壹人ツ、

但鉄壹枚二日押四人宛仕立押、三日押其心得  
可有之事

一 てらし 三百九十八人 一日壹人壹分積り

二日押壹枚二付凡四人半積り、只今八  
貫目てらし二致申候間人夫不知、前方  
八六ツ吹二小舟てらし共廿五人程入申  
候、只今二而八涌口あしく候節、小舟  
てらし入申候二付、先積り二人不申候

一 間炭負 千五百九拾三人

一日四人半ツ、

但凡出炭拾九万千百六十貫匁、炭入凡百廿貫

匁として、但一人役一里三十三貫匁

一 釜山渡し人 凡六千六人

一日十七人

釜数貳百七十三かま、渡し人廿貳人、山二方

十七人<sup>六脱カ</sup>廿五人、其外も違申事二候

一土口 五千百六十四人

一日拾六人

鉄杓枚廿四太入、此貫目七百六十八貫匁也、

凡杓人役二拾貳貫目取申候、是八余り無数候、

只今二而八貳拾杓貳貫匁当儿、鉄杓枚六拾四

人程入申候

一小屋遣 七百貳拾人

一日貳人ツ、

杓ヶ月薪取三十人、小屋遣五人、たい松五人

飛脚十五人、夜廻り旁、右之通程入可申候

一山内貸人 一日杓人ツ、

九口ノ杓万六千九百四十五人

此人数五拾貳人、一ヶ月二一人前廿七日詰メ、

一ヶ月二三百廿四人ツ、致し候

但子供其内二有之候八、廿人ヲ十人二立可

申事

此内

十人番子  
十六人土口  
廿人掛人

杓人鉄砂洗  
五人炭負

右之趣心当召抱可申候、乍然右積り<sup>カ</sup>山二<sup>カ</sup>多  
少可有之候、番子八人ヲ十人抱置かま山へも遣  
し又八増灰てらし土碎遣可申候、尤新かま打申  
節八山奉行心持二而人夫抱、又八掛切日用遣可  
申事也

21 四ツ吹一ヶ月入用

一貳百八拾八匁三分五厘

吹銃貳百廿四太

扶持八石四斗八升六合

吹日三百五十四日

一百四拾四匁杓分六厘

扶持七石四斗三升四合

一百五拾九匁三分

扶持六石三斗七升貳合

一貳貫貳百三拾匁五分

扶持六拾四石八斗

又

洗米八斗八升五合

一三貫拾六匁六分七厘

一枚二杓升  
番子賃

大工十分一

貳匁三分

貳升四合

炭坂十分一

杓匁一分五厘

跡押

月十三匁五分

杓升八合

伐り子十分一

拾匁五分

一枚二杓升

番子賃

役千四百九拾六人

鉄数八十八枚半

一枚拾六人

一人前月六十式匆五分

扶持拾壹石六斗六升四合

又

夜食貳石六斗五升五合

一人前一夜三合ツ、

一五拾八匆四分壹厘

八十八枚半

一五拾三匆貳分八厘

一四拾五匆壹分

壹枚代壹匆壹分

四十五枚代

一六貫七百四拾八匆

壹万三千四百九十六人役、月十五匆

扶持百貳拾壹石四斗六升四合

一三貫三百八拾壹匆三分

役三千八十三人

役一萬六千五百七十九人

内

六千六人

貳百七十三かま、一枚廿貳人

三百五十四人

鉄壹枚四人

三百九十八人

鉄壹枚四人共

三百五十四人

鉄壹枚四人

五千六百六十四人

一日拾六人

七百貳拾人

薪小遣たい松飛脚夜廻り

五百四十六人

貳百七十三釜一枚貳人

千五百人

一枚百五十人ツ、

三百九拾人

四百七拾人

一八百七拾六匆壹分五厘

役千五百九十三人

渡し人

土碎

てらし

鉄砂洗負入

土之口

小屋遣

釜山普請人

新かま十枚

早掛普請

道直し

雪ほり

間炭負

出炭十九万千石六拾貫匁

一人役百貳拾貫匁

吹銑貳千百貳十四太

平し九拾貫匁吹

扶持拾四石三斗三升七合

一壹貫七百目

小屋遣

一貳百目

灯油代

一三百貳拾目

才道具賃

一百五拾三匁

狸皮

一ヶ年四十五枚、一枚三匁四分として

一五石四斗

出入扶持

一貳拾石壹斗六升

小屋扶持

一日八人七合平しとして

22 鍛冶方入用

平し拾九匁七分式厘

一七拾六貫四百六十四匁

鉄砂代

吹銑貳千百廿四太

鉄砂四太半二して

此鉄砂九千五百五十八太

壹太二付八匁かへ

二口合百拾八貫三百四拾八匁七分六厘

内

吹銑貳千百貳拾四太

平し五拾五匁七分式厘

一七貫三百五拾目

鍛冶賃  
百五匁かへ

鍛冶屋八軒有、一日二六軒出来積り

正月三日、三月一日、四月一日、五月一日、

七月二日、九月一日、十一月一日

十日休引、残り三百五十日

役貳千百人役賃銀也

八十五匁かへ

代銀貳拾貳貫四百拾匁八分四厘

合四拾壹貫八百八拾四匁七分六厘

内

吹銑貳千百貳拾四太

一拾貫九百貳拾目 手子賃、壹匁三分

手子三人

役八千四百人

吹差壹人

一壹貫四百七拾目 後吹、七分

一壹貫貳百目 役貳千百人

ほうひ銀

一貳百五拾貳匁 羽口、壹分貳厘

貳千本代

一六百三拾目 右土代、三分ツ、

一壹貫百五拾五匁 銑下ヶ賃、五分五厘

銑貳千百太

一三貫百五拾目 諸人用

塩代諸人用共

一拾貳貫六百目 小炭代

貳千百軒分、一軒三升ツ、

貳匁かへ、小炭六拾三石代

八合焼

此役七千八百七十五人 一日廿貳人半入

一米百貳拾六石 鍛冶屋、貳千百軒

八十五匁かへ 一軒二六升

代拾貫七百拾匁

〆四拾九貫四百三拾七匁

又

一百拾七貫拾貳匁 銑代

銑貳千百太代、五拾五匁七分貳厘

合百六拾六貫四百四拾九匁

内

正三萬八千貳拾貫匁

廿四貫貳百目 平し二して

太〆千五百八拾八太四貫匁

太二付平し 百四匁八分八毛

右四ツ吹積り

元文四未年仕出し也

23 劔 但是八古銀立也

一大工 劔一枚 壹匁五分

一炭坂 同 七分五厘

一跡押 月 九匁

一山子 劔壹枚十分一、八匁五分

銑一枚七分ツ、之積り

一番子 上 拾五匁

一 鉄筒

六拾貫匁  
七拾貫目迄

但どふからけ 式人

一 右之筒十八九人<sup>カ</sup>式拾式人迄

但十八九人位宜敷候、とうからけ式人

一 右之とう引之事、山内中伝役右石引かつら小屋<sup>(切カ)</sup>カ<sup>(切カ)</sup>出り出し申候事

一 劔いほ打山子伝役勤来候事

一 鑪本主かまぬり仕掛仕候まで、一日一夜劔二相勤申候、仕掛仕候て朝帰、又晩二参相勤申候事

一 劔折壺へ引込申節、山子番子伝役二相勤申候

一 劔さめ仕候節、上鉄八なち次第二番子共取来り

申候、尤右上鉄壱貫匁二付式分五厘宛二小屋へ買取申候

一 劔さめ仕ら八て<sup>(ママ)</sup>のせ申節、てこ大小八本番子

伝役二仕来り申候事、右之劔のけ申節、大キ成

<sup>(カカ)</sup>うし式本入申候、是八小屋カ<sup>(カカ)</sup>きらせ申候

一 釜ぬり灰ノ手子灰銀札二枚、しなへ六本遣し申候

一 かきの糸番子遣し来り申候事

一 つほの灰さび申節、山子女房罷出相勤来り候事

一 劔折大折仕候節、十七八人掛り申候事

一 劔小折十七八人カ<sup>(カ)</sup>廿式三人迄掛り申候、劔折仕候節八朝六ツカ<sup>(カ)</sup>相勤、たい松ともし仕舞候事も有、尤情<sup>(精)</sup>出し折申日八酒給させ申事也、どう前奉行大小便二出候得者代り相勤可申候事

一 劔小折仕候時分、毎日鉄作り一人宛掛り申候、外二炭ほり老人老人遣申候事

一 小折仕候節、半端劔晩二掛改仕、札さし元小屋へ相渡し申候、又明日出し候節、改札見合可申事

一 大折仕元小屋へ渡シ候節、大小数改、劔壱枚分何程と仕候事二候、山子誰分と名付札付候事

一 番子共かまたいぎ二荷宛出し来り申候、尤遣し不申候得八返<sup>(通)</sup>付候節、番子返<sup>(通)</sup>二付可申候

一 山子共さめ之夜、不残鑪へ相勤、番ヲ仕候事

一 劔一枚二米壱升ツ、洗米山子へ遣し申候

24 辰盆前一ノ谷山二而

劔押入用

一 吹炭七千式百九拾壱貫匁

銀壱匁二付、炭七貫百九拾匁二当ル

代壹貫拾貳匁七分貳厘

一番子貳百八拾八人

十五匁かへ

代百四拾四匁

一てらし五拾四人

拾匁かへ

代拾八匁

一鉄砂洗十貳人

九匁かへ

代三匁六分

一土口四拾七人 ふしん

七匁かへ

代拾匁九分七厘

一三人

代七分

一鉄砂貳百四拾太

四匁五分四厘かへ

代壹貫八拾九匁六分

一拾八匁

一九匁

一七匁貳分

一三匁

一貳匁五分

一七匁七分七厘

一四分

一六分

一壹匁貳分

一貳貫三百廿九匁貳分六厘

一米五斗七升六合

一同五斗四合

一同壹斗貳升

一同貳斗八升八合

一同三石三升六合

一四石九斗五升六合

四十八匁かへ

代貳百三拾七匁八分九厘

古銀二テ

二口合貳貫五百六拾七匁壹分五厘

内

釘数拾貳枚

平一枚二付

大湯やり三本、直し

小湯やり才三本<sup>カ</sup>

新かすかへ七丁

すみほり才十二丁

小槌才六丁

いほ打才八丁

大工扶持

炭坂扶持

洗米

夜食

番子

貳百拾三匁九分三厘

古銀二而鑪出来

一十七人

十分<sup>(匁方)</sup>

どうからけ

25 辰盆後劔折入用

一五拾六人

折坪ふしん

ちん五匁六分七厘

一八拾八人半

劔大折

十匁かへ

ちん十八匁六分七厘

一四十七拾人

同小折

一貳拾四人

かつら立

九匁かへ

ちん七匁貳分

七百五人

ちん百四十八匁八分三厘

一七人

はね木切

十匁かへ

ちん貳匁三分三厘

古銀<sup>ノ</sup>貳百廿四匁貳分貳厘

又七拾八匁四分八厘 右古銀二而三割半増

一壹人

す<sup>(方)</sup>切

ちん三分三厘

一壹石五斗一升七合六勺

二八米

一三人

綱打

一貳斗七合

小右衛門ふち

八匁かへ

ちん八分

一九合

久七ふち

一三拾九人

石焼

一壹升貳合

喜六ふち

九匁五分

ちん拾貳匁三分五厘

一七斗七升

喜太郎ふち

劔折之間、出入ふち

四十八匁

代古銀二而四百三十六匁五分四厘

又貳百拾八匁貳分七厘 右古銀五割増

一文銀貳匁四分七厘 すみほり

十九丁才

一同 四匁貳分四厘 小槌才八丁

一同 八分七厘 釘かけ壹丁

一文銀百五拾五匁八分貳厘 酒代

一五拾壹匁八分貳厘 三分三厘 蕙百五十七枚

一八匁貳分壹厘 三ぞ代

一四拾壹匁九分三厘 釘折之節村方衆  
被參諸入用

一拾壹匁貳分三厘 平 八 へ  
ほうひ二遣ス

一拾五匁三分 肴代

×貳百九拾一匁八分八厘

文銀合壹貫貳百四拾九匁三分九厘

内

釘九拾束拾五貫五百目、折坪出来

平し壹束二付

拾三匁七分三厘二当ル

寄

盆前鑪二而出来入用

一古銀貳貫五百六拾七匁分五厘

又壹貫貳百八十三匁五分七厘 五割増

×三貫八百五拾匁七分貳厘

盆後釘折入用

一文銀壹貫貳百四拾九匁三分九厘

合五貫百匁壹分壹厘

内

釘九拾束拾五貫五百目出来

平し一束二付

五拾六匁四厘二当

外二山右山崎へ太賃

束貳匁貳厘掛ル